

昨年 10 月から鍼の研修会を開いている。鍼灸学校に入ったばかりの人は、からだや病の見方に関して、一般の人とほとんど変わらない。初心者に教えるに当たって最も大切だと思ったのは、鍼によってからだに変化し良くなるという体験をしてもらうということである。しかも患者の自覚としてでなく、施術者が明確に分かるものでなければならない。

研修会では互いに患者役となって練習する。多くの場合、患者役の自覚症状は明確ではなく、検査で異常値があったわけでもなく、いわゆる病人ではない。西洋医学であれば、健康人ということになり、治療はできない。東洋医学では全ての人が治療の対象になる。病人と健康人との間に明確な境界はなく、東洋医学的に見れば、全ての人がそれなりに病んでいると言っている。

病には本末がある。根本と枝葉末節である。例えば手が腱鞘炎で痛むとしたら、その局所である手は枝葉末節で、局所のその症状は度合の差があるとしても根本であるからだの状態に根ざしている。腱鞘炎の場合、手の使い過ぎというのは最後の原因である場合が多いが、その前からからだに血毒をかかえていたという母体たる原因が多くの場合にあるわけだ。局所的な治療をし、使い過ぎをやめれば、その腱鞘炎は治るだろうが、根本の血毒が減らず、血毒を生み出すからだの状態が変わってない以上、腱鞘炎は再発するだろうし、別の要因によって新たな症状を引き起こすことにもなるだろう。

根本であるからだの状態を診るのに私たちは腹診をする。狭い意味での腹を中心に体

幹部全体の状況を診る。

多くの人は自分の腹がいかにか凝っているかを知らない。凝りということだけでなく、様々に異常を診て取ることができる。健康な腹とは温度差がなく、凝りやツツパリがなく、適度な弾力を持ったものである。喘息とか精神的なストレスが強い人は胸が熱いだろう。胃が慢性的に調子悪い人は上腹部が冷え、ガスがあって張っていたり、叩くと水の音がする場合もある。婦人科的な問題がある人は下腹部が冷えていたり、硬かったり、軟弱過ぎる場合もある。

そうした腹の異常を無くすことが、そのま

ま根本であるからだを治療することになる。鍼医たちとしている私たちにとっては、腹診によってからだ状態を把握し、鍼することによって、腹の異常を無くすことは根本的なことであるわけだ。

研修会では腹の状態が鍼する前後でいかにか変わるかということをしっかり分かってもらう。背中に鍼するのが効果的なので、背中に鍼をする。それでほとんどの場合、全体的に硬かった腹は明確に緩む。治療後の緩んだ腹を診れば、いかに治療前の状態が異常だったかが分かるわけである。

腹が緩み、腹の異常がとれるということは、鍼がどんな病にも、特に内科的疾患にも対応できるということを知る入り口である。腹が緩むということは、腹の血流が回復し、内臓機能が正常化に向かうということである。

ところで、腹が硬いのは腹筋を鍛えたからだと思っている人がいる。大間違いである。

(2005 年 9 月秋分前)

